

Interdialectal Communication at School — A Collection of Conversations between Teachers and Students —

YOSHIMURA Yumiko

Abstract

This study aims to examine how so-called "unrecognizable dialects" cause misunderstanding between teachers and students when the participants do not share the same language.

Analyzing conversations reported by fifty-two university students, we found the following characteristics in the listeners' reaction to the dialects they could not understand. Teachers might ask students about their meanings when they did not understand them, but students rarely asked teachers about them. Instead, they might give a safer answer such as "Yes," or respond to a clearer part of the teachers' utterance. Students are even misunderstood and scolded by teachers.

We propose that teachers in elementary and secondary schools do not repeat words in unrecognizable dialects when newly-transferred pupils or students cannot understand them. The children might be frozen not knowing the meaning of teachers' words. Teachers should soften their language and switch to standard Japanese, and slowly introduce local expressions so that the children can become familiar with their new communities. University teachers are required to speak standard Japanese as a lingua franca since university is a place where students and teachers come from various regions.

学校における異方言話者とのコミュニケーション —教師と学生の会話集—

吉村弓子

はじめに

吉村（2019）は、当該地域では方言と認識されずによく使われるが他の地域では通じない言葉、いわゆる「気づかない方言」によってコミュニケーションが思い通りに運ばない会話例を大学生から収集した^{*1}。聞き手の反応に注目して分析したところ、会話1・会話2の下線部のように、復唱や質問が方言の解説を引き出し、理解に結びつくことが見て取れた。

会話1（大学の授業開始前、学生同士）

A：教室の裏の方、座ろう。

B：？ 裏？

A：ん？ああ、後ろのほう！

B：なるほどね。

会話2（大学院生同士）

A：なんだか忙しそうやね？

B：そう。今日何時に帰れるかなあ……。

A：（実験すること）よーけあるん？

B：ん？よ、容器ある？

A：え、よーけ、あるの？

B：どういうこと？

A：することがたくさんあるの？って聞いたかった。

*1 収録した方言を新たにまとめ、付録に示す。

B：「たくさん」のことか、それはわからん。

A：愛媛では「よーけ」って言うんよ。

B：今度からは理解するわ。(笑)

確かに学生同士や親しい間では効果的な方法であるが、相手が目上の人やあまり親しくない人であれば、どうだろうか。自分の語彙が貧困であるために理解できないのではないかと恥じ入ったり、質問すること自体が失礼になるのではないかと遠慮することが危惧される。そこで、本稿では学生にとって最も身近な目上の人として教師を想定し、学生と教師の間で方言が使われる例を収集・考察した。

2. 会話例の収集方法

2. 1. 調査協力者

豊橋技術科学大学 2019 年度前期開講科目「日本の言語と文化」^{*2} の履修者 68 名で、内訳は次の通りである。

学年：工学部 3 年次 27 名、大学院工学研究科博士前期課程 1 年次 41 名

性別：男 62 名、女 6 名、その他 0 名^{*3}

年齢：20 代前半 59 名 20 代後半 9 名

国籍：日本 55 名、中国 1 名、マレーシア 7 名、インドネシア 3 名、ラオス 1 名、ベトナム 1 名

国内出身地：北海道 5 名、岩手 1 名、秋田 1 名、栃木 3 名、千葉 2 名、神奈川 1 名、富山 2 名、石川 3 名、福井 4 名、岐阜 5 名、静岡 1 名、愛知 7 名、三重 1 名、滋賀 1 名、京都 1 名、大阪 1 名、兵庫 2 名、奈良 1 名、和歌山 1 名、広島 3 名、香川 4 名、愛媛 2 名、福岡 1 名、佐賀 1 名、鹿児島 1 名

2. 2. 調査方法

時期 2019 年 7 月 4 日～7 月 17 日

方法 学習管理システム Moodle を利用して、宿題として行った。7 月 4 日の授業時に以下の説明と回答例をスクリーンに投影し、口頭説明を行った。

<説明>

高専や大学の授業や研究室活動において、先生と学生の方言が違うことによって意味が通じなかったり誤解を招いたりする場面を取り上げ、その場面の<状況><スクリプト><分析>を

*2 豊橋技術科学大学は工学部だけの単科大学で、全ての学生が工学を専攻している。当該科目は、学部および大学院において、いわゆる教養の選択必修科目として開講しており、シラバスは以下で公開している。

<https://kyomu.office.tut.ac.jp/portal/public/syllabus/>

*3 女性語・男性語についての宿題もあるため、性別について尋ねた。選択肢は SOGI 等に配慮して「男、女、その他」とした。

回答例を参考にして書いてください。

- ・ 実例（実際に体験した例）でも作例（創作した例）でも良い。
- ・ あなたは、会話の当事者でも目撃者でも良い。
- ・ 方言を話したのは、先生でも学生でも良い。
- ・ 方言名がわかれば方言名を「先生（津軽方言）、学生（広島方言）」のように、方言名の不明な場合は出身地域を「先生（不明）、学生（愛知県豊橋市）」のように書くこと。

回答例 1

<状況>

研究室のミーティングが終了し、学生は車で帰ろうとしていた。先生はいつもバスで通勤している。

<スクリプト>

学生（高知）：先生、もうお帰りですか？

先生（東京）：うん。そろそろ。バスは 30 分後だな。

学生：僕、車なんで、積んで行きましょうか。

先生：積んで？

学生：はい。

先生：……。

学生：同じ方向なんで。

先生：じゃあ……、お願いしようかな。

（車中あまり会話はなく、先生は不機嫌なような気がしたが、学生は理由が分からなかった）

<分析>

共通語では人は「乗せる」、物は「積む」と区別して使うが、高知では人も物も「積む」と言う。高知出身の学生は「(先生を) 積んで行きましょうか」と申し出たのだが、先生は東京出身で高知での言い方を知らなかったため「積む=物」と解釈し、荷物扱いされたようで気分を害した。学生は「日本の言語と文化」の授業で気づかない方言「積む」を知って、やっと状況を理解した。

回答例 2

<状況>

研究室のミーティングが終了し、学生たちは帰ろうとしていた。先生はいつもバスで通勤している。

<スクリプト>

学生（高知）：先生、もう帰りますか。

先生（東京）：うん。そろそろ。バスは30分後だな。

学生：僕、車なんで、積んで行きましょうか。

助教（大阪）：おい、「積んで」はないやろ。

学生：え、なんでですか。

先生：そうだな。荷物じゃないんだから。

学生：高知ではそう言うんですが。

助教：え？人も荷物もいっしょなん？

学生：はい。

助教：人は「乗せる」、物は「積む」やで。

先生：そうだよ。人に対して「積む」は失礼だ。

学生：うわー。方言だったんだ。知らなかった。勉強になりました。以後気をつけます。

<分析>

共通語では人は「乗せる」、物は「積む」と区別して使うが、高知では人も物も「積む」と言う。高知出身の学生が「(先生を) 積んでいきましようか」と申し出たところ、大阪出身の助教からチェックが入り共通語での使い分けを教えられた。先生からも人に対して「積む」は失礼だと指摘された。しかし、高知での使い方を伝えることができたので、失礼な人という誤解は解消された。

「積む（高知）→乗せる」の用法に関しては、当該授業の教科書『日本語のバラエティ』の「ケース8. 気づかれにくい方言」で取り上げられており、5月16日の授業で解説済みであったため、調査協力者たちが知識を共有していると考えた。回答例1と2の<状況>および<スクリプト>は、調査協力者たちが遭遇しそうな会話として筆者が作成した。いずれの会話においても方言の発話者は学生であるが、1は方言の意味が理解されないままに終わる場合、2は問答によって意味が明白になった場合として挙げた。

3. 調査結果と考察

調査協力者68名のうち67名から回答を得たが、学生-教師間ではない会話が15例含まれていたため、これを除いた52例について考察した。方言の発話者は教師の場合26例、学生の場合26例と、同数だった。実例は11例、作例は41例と、実例はあまり得られなかった。

52の会話例を、まず方言の発話者によって2分類し、次に発話以降のコミュニケーションの流れによって再分類する。以下、各分類から1~2例ずつ、計21例の会話を紹介する。紙幅の都合上、

<状況>は簡略化して会話番号の後の括弧内に収める。<スクリプト>の中で話者の出身地は登場人物すべてについて記述されていたが、ここでは方言発話者についてのみ示す。<分析>は省略する。まとめとして、話し手の方言、聞き手の理解、方言の意味を、「方言（主な地域）／聞き手の理解→方言の意味」という形で記述する。

3. 1. 教師が方言を話した場合

3. 1. 1. 無理解・質問→解説→理解

会話3（東京で日本語を習得した留学生が、岐阜県の学校に入学して） 実例

先生（岐阜）：モップをかけるので、机をつってください。

学生A：机を「つって」？

学生B（岐阜）：机を「持ち上げて動かす」と言う意味です。

学生A：うわー。岐阜弁は面白いですね。

「つる（中部）／？ → 持ち上げて運ぶ」

学生Aが無邪気に質問できたのは、留学生の特権であろう。理解できない言葉があるのは当然、と本人も周囲も考えている状況がある。また、質問した相手が先生ではなく日本人学生であるのも、心理的抵抗を和らげる要因となっている^{*4}。

3. 1. 2. 誤解・誤反応→気づき・解説→理解

会話4（卒業論文のまとめに追われてる時期に、研究室で） 作例

先生（栃木）：おお、もう来ていたのか。早いな。

学生：はい。実験の考察をどうまとめればよいか迷ってしまっ

*4 日本人であっても方言が通じないことは十分にあり得るが、日本語がわからないという初めての経験に対する衝撃が大きすぎて茫然としてしまうことがあるようだ。特に年齢の低い児童・生徒が転校して言葉が通じない場合、先生の配慮がないと次の例のように悲惨な状態になってしまう。

例1 今回の宿題の回答 中学時代のクラスメートの実体験

先生（岐阜）：掃除の時間なんで、みんな机をつってねー。

生徒A（京都）：……。

先生：そこのA君、ぼーとしてないで机をつってください。

生徒A：……？（茫然と立ち尽くしている）

例2 お笑いコンビ、ナイツの塙典之氏の実体験（小路幸哉・大崎善生ほか（2012）pp.308-309 を本稿の会話スタイルにならって編集した）

先生（佐賀）：そこ、なんかかんな。

児童（千葉）：すみません。（意味はわからないが取りあえず）

先生：なんかかんなあ！（怒鳴る）

児童：はい！（大きな声で）

先生：なんかかんな ちよろうが！（叩く）

最後の「なんかかんな ちよろうが」は、「よりかかるなって言ってるだろう」という意味である。

先生：それ、だいじか？

学生：え、大事じゃないですか。考察ですし。

先生：そりゃ大事だけど。(笑) さっきのは、栃木弁で大丈夫か？って意味だよ。

学生：え、そうなんですか。初めて知りました。

「だいじ（北関東）／大事、大切 → 大丈夫」

学生が気軽に質問できたのは、卒業論文の指導を数ヶ月間にわたって受けてきて、親しく話せる関係になったためであると考えられる。

3. 1. 3. 誤解・誤反応→言い換え→会話成立

会話5（ゼミ開始時に鍵を持ってくるのを忘れた先生と留学生）作例

先生（愛知）：Aさん、鍵をもちに行って。

学生A：鍵はどこまで持っていきますか。

先生：いえいえ、もちに行って。鍵を取りに行って。Take the key from my room.

学生A：そうか。はい、いま取りに行きます。

「もちに行く（北関東・中部）／持って行く → 取りに行く」

先生が「もちに行って」を「取りに行って。Take the key from my room.」と言い換えたことにより会話は成立したが、「もちに行って」が方言であることには、学生も先生も気づかなかったと思われる。

3. 1. 4. 誤解・誤行動→気づき

会話6（研究室で先生が留学生に実験について説明）実例

先生（大阪）：この電気があかくなったらすぐ電圧記録せんといかへん。全部の電圧に対する温度状態を2桁まで書いといて。あしたの昼、その結果ちょうだいな。

学生：はい、この電気が赤くなってから記録します。あしたの昼間、先生に報告します。

先生：よろしっ！

（翌日）

学生：昨日、1時間待っていても電気がずっと緑色のままで赤い色にはならなかったのですが……

先生：その電気6時間待っても赤い色にならんぞ。あっ待った、ごめん俺の言い方が悪かったかも。また説明し直すわ。

「あかい（西日本）／赤い → 明るい」

3. 1. 5. 誤解・とりあえずの返事→会話成立

会話7 (研究室で) 作例

学生A: (はあ、なんだか調子が良く無いな……)

先生 (栃木): どうしたA、体調が悪そうだな。だいじか?

学生A: ……はい。(だいじって何が大事なんだろう。)

先生: そうか。辛かったら保健室行くといいぞ。

「だいじ (北関東・中部) / 大事、大切 → 大丈夫」

学生は何も返答しないことが失礼だと思い、とりあえず返事をしたという設定である。会話は表面上は成立しているが、学生は「だいじ」の意味を理解していない。一方、先生の方も「だいじ」が方言であるために学生に通じていないという深層には気づいていない。

3. 1. 6. 無理解・文脈から推測→会話成立

会話8 (明日の報告会について打ち合わせ) 実例

学生: 先生、明日の服装はスーツですか?

先生 (京都): 顔がささない程度ならいいよ。まあ、スーツが無難ではあるけどね。

学生: (えっ? 顔がささないって何?) はい、わかりました。スーツで行きます。

先生: では、明日頑張ってください。

「顔がさす (京都) / ? → 人目につく」

発表が近くてピリピリとした雰囲気だったため、学生は「顔がささない」の意味は聞かなかったという。「スーツが無難ではあるけどね」という部分に応じて「スーツで行きます」と返事し、会話が成立した。しかし、実際のところ、「顔がささない」の意味は分からないままとなり、後で調べて意味を知ったとのことである。また、先生もそれが方言であり、学生に通じていないという気づきには至らなかったと思われる。

3. 1. 7. 誤解・誤反応→無理解・質問

会話9 (ミーティング終了後) 作例

学生: いやあミーティング長引きましたね。

先生 (愛知): こんなに長引くと思わなかったよ。さすがにえらいね。

学生: (……えらい?)

先生: 学生もえらいだろ?

学生: ……そうですね。これだけ長いことミーティングしたんで自分をほめたいですね!

先生：ほめる？ 何を言ってるんだい？

学生：？

「えらい（中部・近畿）／偉い → 疲れた」

会話 10（研究室で）作例

先生（西日本）：今週のゼミを終わります。それと研究室なおしといてや。

学生：壊れているパソコンを直せっていうことかな？ すみません、直せません。

先生：なんでや？

学生：機械に強くないので……。

先生：機械、関係ないやんけ。

「なおす（西日本）／修理する → 片付ける」

3. 1. 8. 無理解・誤行動→叱責

会話 11（東京で日本語を学んだ留学生が三重県の学校に入学して） 実例

先生（三重）：開始時間になるまで問題を見てはあかんぞ。

学生：指示がわからなかったので、問題を見始めた

先生：何しとる。あかん、言うたやろ。

「あかん（中部・近畿・四国）／？ → ダメ」

3. 2. 学生が方言を話した場合

3. 2. 1. 無理解・質問→解説

会話 12（食堂で） 作例

先生：今日のメニューのとんかつ旨いな。

学生（香川）：はい、でもちょっとむつごい気がしますね。

先生：え？むつごい？

学生：ああ、ちょっと脂っこいっていう意味です。

「むつごい（四国）／？ → 味が濃い」

3. 2. 2. 誤解・誤反応→気づき・解説→理解

会話 13（研究室で打ち合わせ） 作例

学生（愛知）：先生、明日ミーティングをやりたいのですが、よろしいですか？

先生：いいよ、何時からにしようか？

学生：では3限目の放課からはいかがですか？

先生：ん？放課は5限の後だろ？何を言ってるんだ？

学生：あつ、すみません。愛知では放課は休み時間の意味なので……。

先生：そうなんだ、知らなかった。じゃあ、3限の後からミーティングだな？

学生：はい、お願いします！

「放課（愛知）／放課後 → 休み時間」

3. 2. 3. 無理解・質問→言い換え→気づき・確認→理解

会話 14 (研究室の忘年会で) 作例

先生：今日はたくさん食べたね。

学生 (香川)：そうですね。もうお腹がおきました。

先生：お腹が起きる？

学生：先生はまだお腹がすいているんですか？

先生：もしかして、お腹がおきるっていうのは、お腹がいっぱいって意味？

学生：そうです。

「お腹がおきる (四国) / ? → 満腹になる」

3. 2. 4. 誤解・質問→気づかず・返事→誤解・質問→気づかず・返事→誤解・質問→気づかず・返事→気づき・確認

会話 15 (研究室の引っ越し) 作例

学生 (香川)：先生、この机を運びたいのですが、重くて、一人では無理なので、片方かいてもらえませんか？

先生：構わないけど、何に何を書けばいいの？

学生：引越し先に机をかいて行きます。

先生：机を描くの？

学生：はい。

先生：描いてどうするの？

学生：次の荷物をかいていだけですが……。

先生：もしかして、「かく」とは持ち上げるとか、運ぶって意味かな？

学生：はい、そうです。そういえば方言でした。わかりにくくてすみません。

「かく (四国) / 書く、描く → 持ちあげて運ぶ」

3. 2. 5. 無理解・流れから返事→会話成立

会話 16 (オープンキャンパスの準備中) 作例

先生：オープンキャンパスで使うロボットの輪ゴム取り換えといてな。

学生 (岐阜)：はい、もせてたので換えときました。

先生：……。あ、もう換えたの？

学生：はい。

先生：お、さすが。

「もせる (岐阜) / ? → ボロボロになる」

3. 2. 6. 無理解・流れから返事→会話成立・第3者解説

会話 17 (実験室の掃除中) 実例

学生A (福井)：これってもう使わないのかな？

学生B (福井)：使わないんじゃない？一応、先生になげていいか聞いてみよう。

学生A：先生これもう使いませんか？

先生：あーそれはもう使わないね。

学生A：それならもうなげてしまえばいいですか？

先生：? いいよ。

学生B：おまえ「なげる」は福井弁やから「捨てる」って言わんとあかんよ。

学生A：そうやったんや。

「なげる (北海道・東北) / ? → 捨てる」

学生Aは「なげる」が共通語だと思っていたが、学生Bは小学校の国語の授業で福井弁についての学習があり、「なげる」の共通語は「捨てる」だと知っていたという。

3. 2. 7. 誤解・誤反応→とりあえず謝る

会話 18 (研究に関する相談中) 作例

学生 (岐阜)：〇〇の数値がうまく取れないです。

先生：ここの数値がそれになるんじゃない？

学生：あー。そこ見落としてました。ありがとうございます。先生こすいですね。

先生：こすいってどういうことや。

学生：すいません。悪気があったわけではないんです。

(以後、研究室が暗い雰囲気になった。)

「こすい (岐阜) / ずるい → 賢い」

本調査協力者は岐阜の出身で、この宿題のために岐阜方言を調べた。自身も使用する「こすい」が方言であり、しかも、誤解を招くおそれのある言葉であることを初めて知り、作例したという。

3. 2. 8. 誤解・誤反応→気づかず・返事→誤解・返事→気づかず返事→無理解

会話 19 (研究室で) 作例

学生 (大阪) : そういえば、先ほど研究室を出たとき、鍵をおとしたんです。

先生 : 鍵を落とした?!

学生 : はい。

先生 : 平気で言うことじゃないよ! これは大変なことになるわ!

学生 : え? なぜですか?

先生 : 鍵をなくしたら、誰かが研究室に入れるようになってしまい、非常に危ないよ。とりあえず色んな方に連絡しなければならない。

学生 : あ、違います。鍵をちゃんと持っています。

先生 : ??

「(鍵を) おとす (兵庫) / 落とす → (鍵を) 閉める」

会話 20 (研究について議論中) 作例

先生 : 電極間の距離はもう少し近づけられない?

学生 (広島) : ちょっと材質的にたわんでるので難しいですね。

先生 : なんで、たわんでるの?

学生 : たわんではいけません。伸びない材質なので引っ張ってもこれ以上近づかないんです。

先生 : ?

「たわん (中国・九州) / たわんでいる → 届かない」

3. 2. 9. 誤解・叱責→謝る→現場確認・訂正

会話 21 (実験室での失敗について先生の部屋で報告) 作例

学生 (香川) : 先生、床に水をまきました。

先生 : 水を撒いた? 何をしてるんだ。

学生 : すいません。

(ひどく叱られた後、現場を確認しに行くと)

先生 : なんだこの程度か。拭けばいいじゃないか。

学生 : はい。?

「まく (四国) / 撒く → こぼす」

3. 2. 10. 誤解・訂正→気づき・解説

会話 22 (研究室で) 作例

先生：A 君、何をしているの？

学生 A (茨城)：来週の論文紹介を準備しています。

先生：そっか、どんな論文を紹介する予定なの？

学生 A：えっと、細胞膜の機能についての論文を紹介しようと思います。

先生：なるほど、面白そうだね。頑張ってるね。

学生 A：はい、今からしみじみ勉強して、立派な発表をしたいと思います。

先生：なに？しみじみ勉強する？使い方ちょっと違うぞー。

学生 A：あ、そっか！茨城で「しみじみ」は「しっかり」の意味です。「しっかり勉強する」と言おうとしました。すみません。

先生：それは知らなかったわー。

「しみじみ (北関東) / 心に深く染みる → しっかり」

3. 2. 11. 理解・冗談→無理解・質問→言い換え→会話成立

会話 23 (実験が終了して) 実例

学生 (奈良)：先生、こちらの実験装置はどこになおしたらいいですか？

先生：うん？(笑いながら) その装置は壊れてないよ。

学生：えっ？

先生：まあいいわ、あそこの引き出しに入れといてくれ。

学生：はい、わかりました。(なぜ笑われたのか不思議だ。)

「なおす (西日本) / 修理する → しまう」

この学生は、後日、テレビ番組^{*5}を見ていて、「なおす」が方言だと知り、笑われた意味がわかったという。

4. 終わりに

以上、教師と学生の間「気づかない方言」による無理解、誤解、すれ違いを見てきた。学生の方言が理解できなかった教師が「むつごい？ (会話 12)」「お腹が起きる？ (会話 14)」「何を言ってるんだ？ (会話 13)」と尋ねる会話例はあったが、教師の方言に対して質問した学生は留学生の「机をつって？ (会話 3)」しかなかった。ただし、方言を共通語の意味で解釈して誤解し、「え、

*5 「カミングアウトバラエティ 秘密のケンミン SHOW」読売テレビ制作、日本テレビ系で毎週木曜放送

大事じゃないですか。考察ですし。」と教師に率直に反応する例（会話4）も見られ、学生からの心的距離が近い場合には自然な会話であることが想像できる。距離が遠い場合や緊張した状況では、「…はい」と取りあえず無難な返事をしたり（会話7）、方言以外の発話部分「スーツが無難ではあるけどね」に反応して「スーツで行きます」と会話を成立させていた（会話8）*6。

最終的に叱責を受けたり人間関係が悪くなってしまうことが予想される例も見られた。「問題を見てはあかん」と言われたのに意味がわからず見てしまっただけで怒られた（会話11）、「水をまきました（＝こぼしました）」と報告して叱られた（会話21）、「研究室なおしといて（＝片付けておいて）」に「直せません（＝修理できません）」と答えた（会話21）、ほめるつもりで「こすいですね（＝頭いいです）」と言ったら先生は気分を害した（会話18）が、該当する。

このような事態に至らないためには、どうしたらよいだろうか。会話17の学生Bの言葉が示唆的ではないかと考える。以下に会話全体を再掲する。なお、下線は説明の趣旨に応じて変更する。

（実験室の掃除中）実例

学生A（福井）：これってもう使わないのかな？

学生B（福井）：使わないんじゃない？一応、先生になげていいか聞いてみよう。

学生A：先生これもう使いませんか？

先生：あーそれはもう使わないね。

学生A：それならもうなげてしまえばいいですか？

先生：？いいよ。

学生B：おまえ「なげる」は福井弁やから「捨てる」って言わんとあかんよ。

学生A：そうやったんや。

学生Bは同郷の学生Aと話するときには「先生になげていいか聞いてみよう」と、方言を使っているが、学生Aが異方言話者の先生に「なげてしまえばいいですか」と尋ねた際には、「「なげる」は福井弁やから「捨てる」って言わんとあかんよ」と注意している。小学校の国語の授業で福井弁についての学習があり、それを覚えていたからというのである。

佐藤・米田編（1999）では、家族や地元の人とは方言を使っているが知らない人とは共通語で話すことを心がける人が74%であった。つまり、大多数の人は、方言と共通語を使い分けるバイリンガル生活を送っていることになるが、これを一步推し進め、気づかない方言についても意識してもらうような教育や啓蒙活動ができないだろうか。

たしかに方言はその地方ならではの温かい雰囲気醸し出し、特に、教育現場で先生が方言を話すと空気が和やかになることもあろう。どんなに怖い先生にも故郷があり、方言を話して「○

*6 会話は表層では成立していたものの、深層では方言の理解と気づきがなされないままである。実は、日常のコミュニケーションでは、方言に限らず新語、流行語、若者語、専門用語など理解できない言葉があっても、いちいち問い正さず会話を進めることのほうが普通かもしれない。

○ちゃん」と呼ばれた幼少期があることを彷彿とさせる。しかし、せっかくの方言が通じない、誤解を招くのでは、残念だ。まずは自身の方言を認識し、学生が異方言話者であることも想定に入れつつ方言を使うことが必要なのではないか。「机をつってね」と指示したのに何もしない児童・生徒には、「ぼーとしないで」とは言わず「みんなのように運んでね」と言い換える配慮をしてほしい。そして、出身地が違うことが確認できたら、「この地方では「机を持ち上げて運ぶ」ことを「机をつる」って言うんやよ」と教えてあげてほしい。大学のように多様な方言話者や留学生が集まっている場では、公用語として共通語を使うことが望ましいのではないかと考える。教師の指示どおりに学生が結果を出せなかった時、「ごめん俺の言い方が悪かったかも（会話6）」と自身の言葉を振り返ってほしい。指示が曖昧であったり、手順が複雑であったりしたこともあろうが、方言が邪魔をしていなかったかも吟味する必要があるのではないだろうか。

参考文献

- 上野智子・定延利之・佐藤和之・野田春美編、2005、『ケーススタディ日本語のバラエティ』、初版第一刷、おうふう。
- 佐藤和之・米田正人編著、1999、『どうなる日本のことば — 方言と共通語のゆくえ』、大修館書店。
- 佐藤亮一監修、1997、『日本の方言大研究』、ポプラ社。
- 篠崎晃一、2017、『東京のきつねが大阪でたぬきにばける誤解されやすい方言小辞典』、三省堂。
- 篠崎晃一・毎日新聞社、2011、『出身地がわかる方言：47都道府県、誰とでも会話がはずむ!』、幻冬舎。
- 小路幸哉・大崎善生ほか、2012、『とっさの方言』、ポプラ社。
- 竹田晃子、2019、「災害時の方言とコミュニケーション — 日本語教育と方言研究の連携のために —」『日本語教育』173号、1-15ページ。
- 竹田晃子・吉田雅子、2009、『まんがで学ぶ方言』、国土社。
- 吉村弓子、2019、「異方言話者とのコミュニケーション — いわゆる「気づかない方言」の出現する会話集 —」豊橋技術科学大学総合教育院 紀要『雲雀野』、41号、41-59ページ。

付録

吉村（2019）に収録した方言

方言	意味	主な地域	誤解例
なげる	捨てる	北海道・東北	ほうり投げる
ほる	捨てる	大阪	放置する
えらい	疲れた	西日本	偉い
こわい	疲れた	北海道・東北	恐い
たいぎ	面倒だ、つらい	瀬戸内	大義、大事
なおす	しまう、片付ける	西日本	修理する
われ	お前	本州・九州	我、私
じぶん	君、おまえ	大阪	自分、私
さら	新品	西日本	皿
おちる	降りる	東北	落ちる
ひやす	水に浸す	栃木・群馬	冷たくする
つる	持ち上げて運ぶ	中部	吊りあげる
うら	うしろ	愛知・栃木	裏
鍵をかう	鍵をかける	中部	鍵を買う
しんでよ	しないでよ	愛知	死んでよ
たちまち	とりあえず	広島	直ちに
いぬる	帰る	西日本	犬になる
けっこい	きれい	東海	結構いい
よーけ	たくさん	西日本	容器
からう	背負う	北九州	－
かたがる	傾く	北陸	－
帰りしな	帰る途中	西日本	－
うったて	書道の起筆	岡山	－

竹田（2019）では、方言と同じ語形が共通語にもある場合を「方言1」、同じ語形は共通語にはないが、同じ意味用法があるものを「方言2」、語形も意味も同じものがない表現を「方言3」と呼んでいる。表1の「なげる」から「たちまち」までが「方言1」、「いぬる」から「帰りしな」までが「方言2」、「うったて」が「方言3」に相当する。